

**2017 年度（平成 29 年度）
慈愛園乳児ホーム事業報告**

【今年度の慈愛園乳児ホームの動き】

今年度は前年度の中堅職員退職、法人間移動に伴う新規職員の教育、研修が乳児ホームの一番の柱として活動を目指したわけだが、結果的には新規職員の仕事の飲み込みも早く早期段階でのルーティン及び勤務の正常化が行われ、大きな混乱はなかった。また、ファミリーソーシャルワーカーの育児休業にともない若干の専門職内部移動を行ったが正常に運営できている。当初の見込みでは初級職員が増えるのを考え、仕事内容の簡略化も視野に入れていたが特段、変更もなく内容のある処遇が行われたと思われる。

3年に1度の「第三者評価」を迎えるにあたって、指摘のあった箇所の変更、里親支援専門相談員導入によりマニュアルの大幅な改訂が必要となっていたが、およそ1年間の改訂期間を設けていたのも功を奏し、新しいマニュアルを発行することが出来た。新規発行にあたっては分かりにくかった「養育基本方針」を3つの方針「命に対し謙虚になる」「子ども達の権利擁護者となる」「専門者として、常に客観的であれ」に変更した。第三者評価に関しては処遇面では非常に良い評価を受けた。管理面では旧来からの踏襲ではなく、新規の内容変換に向け準備を行っていく必要があるとの指導を受け、今後、変更していく予定である。

入所児童に関しては冬口にRSウィルスが猛威をふるい入院者も3名発生した。予後が長引く疾病でもあるため1名は再入院するなど、かなり厳しい状態であったが、現在は感染は発生していない。RSウィルス自体は感染経路が風邪と同じ様な扱いである為、防ぐことは難しいが感染者の状態把握は初級職員が多いのもあって、園長自らの判断が必要な場面もあった。これらの反省から看護師による学習会を内部研修として行った。

また今年は地震後の影響と思われるが区と市の連携が甘く、市からの入所児は3名に留まった。その3名も他機関（病院）からの入所となっており、市児相独自の掘り起こしによる入所は行われていない。県児相からは通年よりも多くの児童が入所していることもあり熊本市の要保護児童に関しては特殊な状況に置かれていると考えられる。今年度も里親委託に関しては順調（3名委託、1名慣らし中）であり不調もなく、里親との関係も良好である。

今年度の印象としては、年度当初心配したことは特段、問題無く、入所児数の激減やRSウィルスによる入院と予想もしていなかった問題によって運営の困難さを感じる結果となった。

I. 平成29年度入退所状況、子育て支援事業の概要について

(1) 平成29年度在籍状況（平成29年1月1日現在）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
初日	9	9	8	8	8	9	10	8	8	9	9	8	103人
退所	0	1	0	0	0	0	3	1	0	0	1	3	9人
入所	1	0	0	0	1	0	2	1	1	0	0	0	6人
末日	9	8	8	8	9	9	9	8	9	9	8	5	100人

・一時保護

(県) KY (7/14～8/28) HZ (9/1～9/30) MK (11/2～12/7)
 (市) HS (8/24～10/23) MT (9/28～12/7) HG (3/19～)
 AK (3/20～) KM (3/28～)

・病虚弱児加算対象児童

MM、KR、TI

・被虐待児受入加算対象児童

KK、OM、MT、HS、MK

【在籍児、入所児の傾向】

上記した通り、入所人数は非常に少なく熊本市入所枠は 10 名あるのだが 2 名しか入所していない。養護協議会にて現状を市児相に提言するも納得の出来る回答を得ることができなかった。この状況では 30 年度は暫定定員となるなる可能性が有り、財政的にも厳しい状況となる。

(2) 子育て短期利用事業

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
ショート	0	0	4	8	4	13	3	2	9	2	8	14	67泊
利用人数	0	0	1	2	2	3	1	2	3	1	2	3	20人
トワイライト	2	0	0	0	0	4	1	0	0	0	0	1	8日

【トワイライト・ショートステイ】

前年度の地震以降ショートステイの利用は減っていたのだが今年度に入り増加傾向にある。市児相措置入所分がショートに流れているケースもあり、要保護ケースをショートステイによって代替していることもあり、かなり危険な状態である。

(3) 病児保育エーネホーム利用児童数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
H26年度	94	81	99	60	53	64	71	37	80	130	80	72	921人
H27年度	65	47	75	77	59	53	43	48	64	55	75	67	728人
H28年度	31	38	51	51	60	52	60	49	50	36	49	54	581人
H29年度	46	48	47	55	59	66	34	43	67	82	62	62	671人

【病児保育】

前年度の地震後の状況からは利用人数が増えているが 600 人前後の利用となった。また地震により病児保育建物の老朽が進み、各所修繕が必要になっている。

(4) もうすぐパパママ教室

4月	6月	8月	10月	12月	2月
0名	0名	6名	4名	0名	4名

12月 は本園での感染症流行のため中止となった。

Ⅱ. 平成 29 年度における苦情解決等の状況について

(1) 平成 29 年度苦情受付件数—0 件

(2) インシデント・アクシデントトラブル

レベル—1

書類不備・紛失—2 件 配薬ミス—2 件 打撲—1 件 噛みつき—1 件

レベル—0

戸締まり忘れ—1 件 食事段階把握ミス—1 件 園長への報告遅れ—1 件

本園はアクシデント（事故）インシデント（ヒヤリハット）を分けずに事故レベルによって 0～5 の段階で把握し事故内容を職員会議報告により共有化を進めた。今年度はインシデント、アクシデント含めて前年度と比べるとかなり少なく、軽微なものとなっている。しかし、集中力を欠いたり、責任感の無さから事故につながっていることは毎度のことであり、小さなミスは大事故につながることをお互いに自覚し、自戒していく必要がある。

Ⅲ. 平成 30 年度業務改善事業と課題

(1) 新規事業の構想及び計画

記憶にも新しいところだが 8 月に厚生労働省（正確には塩崎元厚労省大臣）から出された「新しい養育ビジョン」は施設従事者にとって 30 年度も継続的に重くのし掛かってくる問題だと思われる。同時に本法人は来年に 100 周年を迎えるにあたり「これからの社会福祉法人」を考えていかなければならない。また、今後の人口減少問題は日本の社会構造を大きく変化させる可能性もあり福祉の価値観の変革のきっかけとしての喫緊の課題でもある。総じて、慈愛園乳児ホームとしては「新しい養育ビジョン」を否定的に捉えるのではなく、前進する施設のあり方を考える必要がある。

(2) 乳児ホーム保育士会と専門部会

今年度からスタートした専門部会であるが、それぞれの専門が内部研修を行うことが出来、理想的な状態でスタートすることが出来たように感じる。また里親支援では里親サロンを実施し、内容的にも満足の出る結果となっている。しかしながら保育士会については初級職員も多いことから予定していたタイムスケジュールはクリア出来なかった。今年度が特殊な状況という事もあったので長い目で見ていく必要がある。

(3) スーパービジョン、コンサルテーション体制について

今年度は新職員も多い為、基本的な部分の共通認識強化を優先し「職員目標管理」を中心に行うこととした。法人では人事考課を他事業所に先立ち、パウラスホームで試験的な運用を始めている。第三者評価でも指摘されるように今後、人事考課は必須課題である。「職員目標管理」をベースに人事考課の足がかりとしたい。

コンサルテーションについては前年度同様に木庭心理士が行った。中長期計画作成時期に（3ヶ月毎）各職員に対して養育内容のアドバイスを頂いている。心理士の就労時間延長により個別保育も前年度より多く取り入れられるようになった。

(4) 平成30年度事業計画の骨子

- ・法人のあらたなあり方検討に事業所として参加
- ・目的、理念の改訂
- ・統括責任者を配置しサブグループによるチーム制とする
- ・勤務態勢の見直し
- ・保育士会、専門部会の強化
- ・人事考課の検討
- ・乳児ホーム前庭の整備
- ・備品等の修繕、購入